



先般「晴れ舞台は北京」と題して北京五輪に出場した末綱聡子選手のことを書いた。オリンピックが始まるまでは「実は昭和の卒業生で、オグシオに隠れて目立たないがバドミントンの

選手で」等々と、いちいち説明をしなければならなかったが、第一シードの中国選手を破ってか、取材の電話が鳴りっぱなし。

私の手元には東京発行のスポーツ紙が十一紙あるが、北島選手の金メダルに次ぐ扱いで「スエマエ四強、北京の奇跡」と報じている。まさに一夜にして全国に通用する名前になった。

振り返れば、準決勝の第一セツ

トがメダルの分岐点だったと思うが、あの試合の一分四十秒・百七打に及ぶ今大会最長ラリーは圧巻だった。東京の友人からは「決まったかと思えば続いており、やられたかと思えば拾っている。バドミントンは心臓に悪い」という感想が届いた。



草野 義輔

余談だが、末綱選手と戦った韓国ペアで長身のイ・ヒョジュン選手は、高校生の時わが校と合同合宿をした仲。末綱選手とも練習をしている。私が主催

した夕食会にも参加したが、十年後にオリンピックでメダル争いを演じるとは誰も予想だにしていなかった。

猛暑の中、北京からのさわやかな感動に心からのお礼を言いたい。末綱選手、ありがとう！

(昭和学校園高校理事長・日田市)